百済伝説の青木坂

百済（現在の韓国）の禎嘉王は、国をおわれて逃れた。王は、その一族をひきつれて広島県厳島についたが、その後厳島も追われて、高鍋の蚊口浦に着いた。

福智王は本拠地を現在の木城町比木に定めることとなり、一党を引き連れて比木を目指した。

このお話は福智王一行が高鍋の青木から老瀬へと向かわれた途中の小さな山の峠付近にある墓石にまつわるものである。

そこは今は荒れ果て木々と竹藪に覆い隠され、よく探さないと分からないが、石塔が五、六基あり、墓石があることは誰の目にも歴然としている。

その昔、福智王がやっとの思いでこの峠にさしかかると、末の姫君が突然病気にかかられ、手を尽くして介抱されたが遂に亡くなられたそうな。それで仕方なくなきがらは東の方の谷沿いに葬られて、悲しみのうちに比木へと旅立たれたという。

古老は、「私がまだ小さい頃、この峠の下の畑に住んでいたが、腹痛だとか歯痛・足腰が痛いときには、この墓前に油あげを一枚お供えしてお祈りすると、不思議にそれまで痛んでいたのがピタリと治った」と話していた。それで近くの人々は、よくお参りに来たということである。なきがらを埋葬された谷は、現在削りとられて無いが、県道のカーブのところの中ほどだったと話されていた。

この話を裏付けるように、青木坂の通行の習わしというのがある。比木神社の神事「お里まわり」と「大年下り」のとき、袋の中へ御神体を入れそれをかついでいかれるが、その途中、笛と太鼓の音が近づくと、村々の老若男女が沿道に「比木さん」を出迎え、おさいせんを上げて

うらへ

拝むのである。また、その行列の後に大勢のお供も加わって大変な賑わいをみせている。

ところが、この行列が青木の坂にかかると、今まで賑やかに打ちならしていた太鼓と笛を止めて、物音をたてないように静かにそーっと通るのである。葬られた姫君が「私も連れていって」と泣きながら後追いされるので、笛太鼓を止め物音をたてないようにそっと通るというのである。

私は、この話をふと思い出して先日山に登った。姫君の墓石は、落ち葉が積もり雑木や小竹などの中に、形こそ風化しているものの、今も、昔の姿そのままであった。落ち葉を払い、枝をおろし、雑木を切り払ってお祀りした。

誰も参らず、誰も祀らず、姫君の霊はさみしい限りだと思いつつ山を下った。

（採話：老瀬地区　長倉寅男）

平成3年3月発行　たかなべむかしばなし第三集

比木神社のお里まわり

木城比木神社のお里まわりは、私どもが小さい頃の、楽しい思い出の一つでした。神社を出発され、木城、高鍋の各地を、3日間にわたってまわられ、各地では、それぞれに、比木さんをお迎えする行事に、わきたちました。

毎年、秋もたけなわの10月26日、比木神社の境内で、前夜祭が行なわれ、翌27日川田神社へと御神幸になります。

青木や川田の青年たちが、お迎えにいき、神官さんの、笛や太鼓に合わせ、鈴をつけた、シャンシャン馬も加わり、ドン、ドン、ピーヒャラ、ドン、ヒャララと、大勢のお伴が、従っていた様子は、ほんとに、にぎやかなご神幸でした。

ご一行が、宿の坂という所に、さしかかると急に笛や太鼓など、一切のものを、止められたそうですが、これは、この坂の脇に、比木さんの娘さんが住んでおられるので(※)、その娘さんが賑やかさに、後追いされてはかわいそうだというので、出来るだけ静かに、気付かれない様にとの、気持ちだったようです。神様の親心と申しましょうか。思いやりの深い、人間味豊かな神様であったんだなと、感心させられます。

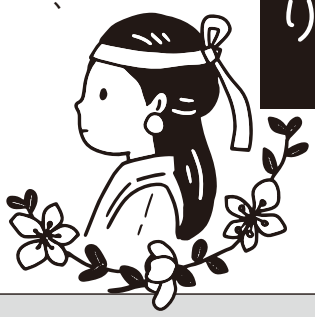
そこを通り過ぎられると、再び鳴り物入りで、村人達のお迎えする、川田神社へとご到着なさるのです。

神社の境内では、家内安全、五穀豊穣のお神楽が舞われました。また各家庭でも、それぞれに、ご馳走がふるまわれていました。

ご神幸も、現在では、時代の流れとともに、車が利用されており何かさみしくてなりません。

（採話：川田地区　財津モトエ）

昭和61年8月発行　たかなべむかしばなし第一集



※比木神社の御祭神の一柱である福智王の姫君が祀られている。

令和6年9月6日発行　発行　高鍋町教育委員会　社会教育課　高鍋町大字上江8335番地2　TEL 0983-23-3326

デザイン・イラスト：ごとうきよ